



# カレブ通信

2017年6月15日  
第45号

## 1 各地カレブの会の7月の予定

### 内容

#### 1 7月の各地予定

#### 2 シニアによるシニアのための“ティкиングオフ”

報告 小川吾朗

#### 3 カレブ ストーリー 1

「平和を作る者」

大野克美

#### 4 カレブ ストーリー 2

「人々を襲う孤独や孤立」

佐藤文紀

- 1) 東京カレブの会：7月11日 OCC 402 午後5:00-7:30  
干場英弘さんの証。闘病生活の中、モンゴル養蜂の発展へ貢献の道。
- 2) 西宮カレブの会：  
第40回例会7月22日、第41回例会8月19日 それぞれハイク予定。
- 3) 宇都宮カレブの会：7月1日 シャローム 午後2:00-4:30  
被造物を通して神を知る道、それぞれの経験から。
- 4) 宇大カレブ： 7月22日（予定） 午後2:00-4:00  
世話人会の交わりと分かち合い、今後の計画立案
- 5) 九州カレブの会 7月15日 午後5:00-6:00 「イエスの福音」マコより

## 2 シニアによるシニアのための“ティкиングオフ”

報告：小川吾朗

「福音による人生のソフトランディングとティкиングオフを互いに助け合う」。これは、昨年の「カレブの会」10周年記念集会で新たに掲げられた「カレブの会」の目標です。今回、「宇都宮カレブの会」のシニアによるシニアのためのユニークな“ティкиングオフ”的事例を紹介させていただきます。

80歳を超えておられるIさんは昨年から「宇都宮カレブの会」に毎回参加されています。医師であったご主人を亡くされ、今はおひとりで生活されています。彼女は今年に入り、月2回、昼を挟んで憩いの場としてご自分の家を開放し、地域の高齢者のために用いていただいております。気さくなIさんだからでしょうか毎回7,8人がこの輪に加わり、和やかな時を持っておられます。孤独な高齢者が多くなり、日常的な交わりの場が失われてきている今日、互いに助け合う場としてこうした場が求められています。

「準備が大変でしょう。」と言いますと、「いや、私はお茶の準備をし、場所を提供するだけです。それぞれがおむすびとお茶菓子を持ってくるから、私は笑顔で迎えるだけ」。そう言って、楽しそうに笑うのです。「どうしてはじめようになつたのですか」と聞くと「Sさんのおかげです。Sさんはご自分のこの場所をカレブの会のために提供し、その上、コーヒー、お茶の準備までして、笑顔で仕えておられる。そんなSさんを見て、私にも近所のみなさんのためにできことがあると思ったのです」。Iさんは求道中ですが、Sさんの姿に「イエスの福音」を見たのではないでしょうか。

このSさんは元建築家で、ひとり住まい。自分の家を開放し、10年近く「宇都宮カレブの会」の例会の場として提供してくださっています。ご自身もこの場所で小グループの聖書の学びをリードされています。この他にも老人ホームの慰問活動に“ティкиングオフ”されているMさん、地域のこどもたちのための読み聞かせグループを立ち上げ“ティкиングオフ”されているNさん。こうしてさまざまな方々が自分の賜物を生かし、まずは、小さく“ティкиングオフ”され、それを楽しんでいます。地域に根差した「カレブの会」のひとつの例を紹介いたしました。お祈りに覚えてください。



## 2 カレブ ストーリー (1)

### 平和を作る者

大野克美



大野ご夫妻

1947 年、埼玉県毛呂山町に生まれる。大学生の時加藤牧師と出会う。現在、万座温泉日進館、相談役、東南アジア文化友好協会、理事長  
群馬県嬬恋村村議會議員  
6期目、地方創生委員  
万座観光協会、副会長

「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです」と聖書にあります。わたしの先生である加藤牧師が後世に残したかったもの。それは、戦争を経験した人も、戦争を知らない人も、戦争の悲惨さをよく知って、二度とこのようなことをおこさないことです。そのためには日本が驕ることなく、アジアの人々に仕えること。アジアの人々と共に働き、お互いが尊敬できるような関係を築いていくことだと思えるのです。



現在私は 3 つの仕事をかけ持っています。1 つ目は群馬県の万座温泉でホテルの仕事をしております。2 つ目は東南アジア文化友好協会の理事長の仕事。3 つ目は嬬恋村の村議會議員の仕事です。

団塊の世代に生まれた私は現在 69 歳で今年の誕生日を迎えると 70 歳になります。人の人生は「出会いで決まる」とよく言われます。まず私の信仰生活を支えてくださった人達では国際ナビゲーターの人達です。私は大学を卒業したのち、すぐ就職はせず、信仰と人格の訓練として、男性 7 人で共同生活をしました。現在のカレブの会の代表である小川吾朗さんと一年間すごさせていただきました。聖書を読むこと、祈ること、証をすること、友との交わりを持つことが学びの中心でした。この一年間の学びが、後の私の信仰生活を支える土台となりました。本当に素晴らしい学びの時でした。

もう一人、私が信仰生活で大きな影響を受けたのは加藤亮一牧師です。現在の、公益法人、東南アジア文化友好協会を創設した方です。私は大学 1 年生でクリスチヤンになり教会に通い始めました。その教会が日本キリスト教団、東京池袋教会でした。私の友人でクリスチヤンになった黒岩賢一さんと共に池袋教会に通いました。黒岩さんは現在の万座温泉、日進館の息子さんで、後に私と共にホテル、旅館経営にあたることになりました。黒岩さんは芸名、泉堅として、シンガーソングライターとして現在も活躍しています。私と黒岩さんが通った、加藤牧師の牧会する池袋教会には隣接して東南アジアからの留学生寮がありました。アジアからの留学生が 20 名位で暮らしておりました。

加藤牧師は第 2 次世界大戦の時、インドネシアのアンボン島で、兵卒というより牧師として過ごしました。アンボン島は当時オランダが支配し、東インド会社があり、クリスチヤンの人が多くいたところです。加藤牧師は悲惨な戦争体験して日本に戻り、「償いの業」の活動を始めました。日本兵と現地夫人との間で生まれた子供、あるいは虐殺事件に巻き込まれて、両親を失ってしまった子供たちを日本に招聘し、彼らを日本の大学で学ばず、あるいは、専門学校で技術を学ばず教育の機会を与え、彼らをアジアの祖国へ戻す事業を開始しました。

この「償いの業」の活動を通してアジアの祖国に戻った留学生は現在 800 名以上にのぼります。祖国に帰って活躍している元留学生も増えています。最近ではアジアの国々から日本にくる若者が増えています。私が議員をしているキャベツ生産で有名な嬬恋村にも農業研修生が多く来ています。インドネシアから 80 名、中国から 50 名、ベトナム、ミャンマーから 40 名、観光面で来ている研修生も入れると 200 名を超えるかと思います。

「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです」と聖書にあります。わたしの先生である加藤牧師が後世に残したかったもの。それは、戦争を経験した人も、戦争を知らない人も、戦争の悲惨さをよく知って、二度とこのようなことをおこさないことです。そのためには日本が驕ることなく、アジアの人々に仕えること。アジアの人々と共に働き、お互いが尊敬できるような関係を築いていくことだと思えるのです。平和をどのように作るか世界のリーダーは悩んでいます。大変のように見えても、確実な方法は、「私たちの周りにいるアジアの若者とよき友人になる」このように心がけていきたいものです

## 3 カレブ ストーリー（2）

### 決して見捨てない主の存在と人々を襲う孤独や孤立

佐藤文紀

何故人の心の中で孤独や孤立が生まれるのかですが、被災地での活動を通して、社会福祉課の方と同行し聞いた事を元に話させて頂きます。

まず、日本人の人々の孤独感は世界から見ても異常なほど高い水準にあります。人の孤独や孤立がどうして起こるのかは、現在はある程度解明されているそうです。そこには、高齢者を取り巻く環境があります。不機嫌な高齢者・キレやすい高齢者・人を阻害する高齢者・感情をコントロール出来ない高齢者。そこには、孤独感の初期症状が蔓延する日本の姿です。

欧米では、人間は年を取るほど、神経質ではなくなり、感情をコントロール出来、誠実さや協調性が増し、敵対的ではなくなる事が科学的統計でも証明されています。しかし、日本では真逆のデータが出ているそうです。

国連の World2017 によれば、日本の幸福度は世界 155カ国中 51 位であり、先進国中では最低位・満足度は OECD Better2015 先進 31 カ国中 29 番目だそうです。病気・肉体の衰え・経済的な不安・死へ向かう事などの様々な要因は世界各国の人々も同じはずなのに、日本だけが吐出して低いのは何故だろという疑問がそこにあります。原因としては、都市化・過疎化・核家族化・少子化等が考えられます。しかし、日本人の心の孤独感を蝕む最も大きな原因是、「承認欲求」だそうです。仕事・子育・家族・社会的な地位により社会的に必要とされていた自分が、いつの間にか必要では無い存在になり、社会から邪魔な存在になってしまふ感覺です。この様な事柄が重なり心労となり孤独と孤立を生んでいきます。

この変化は、ここ 40~50 年間の日本で急速に現れて進み、深層心理においては、人々は大きな心的ダメージを負ってしまいました。この「承認欲求」は、人と話す事により生まれ、人生の中での経緯により心に刻まれます。最も大きな原因是、親から子へ又は仲間同士の会話の中で伝えるべき事がなされていない事が原因です。社会福祉士の方が例えで話してくれましたが、親が言う事を子供は煩いと思って聞くが、自分が進む人生の時々により、親が言っている事が分かり、親の愛情が自分を認めてくれていた事が分かるそうです。

この世は酷い・今の若い者は分かっていない・年を取ったら誰も相手にしてくれない・死への恐怖・老後の心配・経済の困窮・・こんな会話が大部分の高齢者の日常会話です。ただ、私は年配者の方にも丁寧に話します。でも、もしかしたら、今この現状を作ってしまったのは私達自身ではないか。私は、これらの話を聞いている内に、主の事が思い浮かびました。ですから、話さなければ、伝えなければ、高齢者の皆さんがあなたと繋がっていた良き時代の経験を伝えなければならない事を・・。高齢者さんが持っている素晴らしい知恵による御手は神から授けられたものです。確かに人は周りに影響されやすいものです。しかし、周を気にするあまり自分自身の中にある神から与えられた恵みの御手としての素晴らしさを忘がちです。決して見捨てない神の存在。人々を愛し続ける神が与えた人々への恵みがどれだけ素晴らしいものなのかを知る福音。一人一人が神様にとって大切な存在なのだから・・どうか皆様も福音を基に孤独や孤立に落ちて行った人々と語り合って頂ければ幸いです。



佐藤文則さん

昭和 30 年 1 月生まれマスコミ(マーケティング課所属)  
主に背中を押され、退社後、被災地でのボランティア活動に参加 7 年目に入ります。  
宮城県仙台市在住  
妻子 4 人家族

日本人の心の孤独感を蝕む最も大きな原因是、「承認欲求」だとされています。仕事や子育てや社会的な地位により社会的に必要とされていた自分が、いつの間にか必要では無く社会から邪魔な存在になってしまふ感覺です。この様な事柄が大きく心の中での重荷となり、孤独と孤立を生むそうです。

